

日本語母語話者が書いた小論文に関する一考察

— 丁寧体と普通体の混用についての分析を中心に —

黒木晶子

1. はじめに

本稿では、日本語母語話者が書いた小論文を調査対象として、そこで見られる丁寧体（「です・ます」体）と普通体（「である」体）の混用について考察を行う。

通常、小論文作成においては、使用する文体⁽¹⁾を統一するように指導が行われる⁽²⁾。しかし、実際に書かれたものを見てみるとわかるように、この点を徹底させることは容易ではない。たとえば、(1)は、日本語母語話者の大学生が、あるテーマについて20分間で400字程度の文章を書くという条件のもとに作成した小論文の一部であるが、丁寧体と普通体の混用が見られる。

(1) ①私は、自分の家で仕事ができる働き方を選ばない。

②理由は二つあります。③一つは、もし私が家で仕事ができる仕事をしている時、分からないことや、すぐに上司と話したい時など、様々な事が起こるだろう。④そんな時に、会社にいたら、それらのことはすぐに出来るはずだ。… (2003.11.6、No.26)

※用例中の _____ 部分は丁寧体、___ 部分は普通体であることを示す。用例末の

()内の数字は、小論文実施の年月日と、各小論文解答に付した番号を示す。

以下の用例についても同様である。

このような文体の混用を避けるためには、実際の小論文の授業において、文体に関して、単に丁寧体と普通体の混用をしないように指導するだけでなく、より具体的に、どのような点に注意を向ける必要があるのかを学習者に提示す

ることが求められる。そのためにはまず、学習者の書いた小論文に見られる、丁寧体と普通体の混用の特徴を明らかにする必要がある。

以上の点を踏まえ、本稿では、日本語母語話者を対象とした小論文作成の指導という観点から、彼らが書いた小論文に見られる丁寧体と普通体の混用にどのような特徴があるのかを考察する。

2. 先行研究のまとめ、および本稿の目的

日本語の文章・談話における丁寧体と普通体の混用を扱った研究は既にいくつかなされている。その中で野田（1998）は、丁寧体と普通体の混用の問題について、文章・談話の構造という観点から説明を行っている⁽³⁾。

また、野田他（2001）では、談話の中での普通体語形の運用について、日本語学習者の談話データをもとに考察を行っている。

しかしながら、日本語母語話者が書いた、ある程度のまとまった分量の文章を調査対象とし、なおかつその文章が小論文という、丁寧体と普通体の混用が望ましくない文章であるという条件のもとでの考察は、現在のところ、ほとんどなされていないようである。

したがって、本稿では、日本語母語話者が書いた小論文を調査対象として、そこで見られる丁寧体と普通体の混用の特徴を明らかにし、小論文作成の指導のための手がかりとしたい。

3. 調査対象および調査範囲

3.1. 調査対象

本稿では、平成15年6月から12月にかけて、本学の「文章表現法演習」の授業において受講者23名に書かせた小論文を調査対象とした。「文章表現法演習」の授業では毎回、受講者に、20分という制限時間内で教員が提示したテーマについて自分の意見を390～440字の小論文にまとめさせるということを行った。その結果得られた小論文の解答（総数320）に見られる丁寧体と普通体の混用の特徴を調査した。

なお、ここで言う小論文とは、あるテーマについての書き手の主張とその根

拠を提示した文章のことであり、文章の長さが通常の論文よりも短いという点を除けば、論文と性質を同じくするものである⁽⁴⁾。したがって、そこで求められる表現上の制約も、論文の場合と同様に見なしてさしつかえないと考えられる。本稿で問題にする文体に関しても、小論文の場合、論文と同様、丁寧体と普通体の混用はしないよう指導されるのが普通である⁽⁵⁾。しかしながら、論文の場合は、文章全体を通して普通体で書くことが望ましいとされるのが一般的であるが⁽⁶⁾、小論文の場合は、その点が若干論文とは異なっており、必ずしも普通体で書くというわけではなく、課題によって使用する文体を選択することを勧める場合も見られる⁽⁷⁾。

したがって、今回調査対象とした小論文を受講者に書かせる際には、丁寧体と普通体の混用はしないように指導したが、どちらの文体で統一して書くかについては書き手の判断に任せた。

3.2. 調査範囲

今回は、小論文を構成する各文の主節および従属節の述語における丁寧体と普通体の混用のあらわれ方を調査した。

なお、今回調査対象とした従属節は、述語に丁寧体と普通体の両方が来ることができ、さらに従属節の述語と主節の述語の文体の不統一が読み手に違和感を与える可能性があると思なされるものである。たとえば、(2) に関しては、普通体で書かれている従属節の述語「嫌だ」と丁寧体で書かれている主節の述語「選びます」のあいだに不統一感を持つ読み手もいるのではないだろうか。

(2) どちらも嫌だが、どちらか一つを選ばなければならないのなら私は、「テレビ」のない生活を選びます。(2003.7.3、No.5)

これが、(3a) および (3b) のように、従属節の述語と主節の述語が丁寧体と普通体のどちらかに統一されていれば、違和感を感じる読み手はほとんどいないであろう。

(3) a. どちらも嫌ですが、どちらか一つを選ばなければならないのなら私は、「テレビ」のない生活を選びます。

b. どちらも嫌だが、どちらか一つを選ばなければならないのなら私は、「テレビ」のない生活を選ぶ。

一方、そもそも述語に通常普通体しか要求しない従属節は本稿では調査対象としない。(4)がその例であるが、この場合、(4)'のように、通常____部分に「読んでいます」という丁寧体を使うことはない。

(4) これはその子がいつも読んでいる本です。

(4)' *これはその子がいつも読んでいます本です。

4. 結果

4.1. 調査対象とした小論文の解答全体における、丁寧体と普通体の混用が見られる解答が占める割合

今回調査対象とした小論文の解答のうち、丁寧体と普通体の混用が見られた解答は27であった。これは、全解答数320に占める割合から言うと1割弱に過ぎない。しかしながら、これは授業の受講者15人分の解答に相当する。全受講者数が23であるので、半数以上の受講者が1回は、丁寧体と普通体の混用の解答を書いていることになる。したがって、丁寧体と普通体の混用は、個人差はあるものの、一部の受講者だけに関わる問題ではないと言える。

4.2. 丁寧体と普通体の混用のパターン—今回調査対象とした小論文における丁寧体と普通体のあらわれ方—

今回調査対象とした小論文の解答のうち、丁寧体と普通体の混用が見られたもの(全部で27)は、大きく、「丁寧体基調の文章(文章を構成する文の半数以上が丁寧体である文章)」、「普通体基調の文章(文章を構成する文の半数以上が普通体である文章)」、「どちらとも言えない文章(丁寧体と普通体の文が

ほぼ同数あらわれる文章)」の三つのタイプに分けられた。

以下、これら三つのタイプについて例を挙げる。

4.2.1. 丁寧体基調の文章（文章を構成する文の半数以上が丁寧体である文章）

今回調査対象とした小論文の解答において、丁寧体基調の文章、すなわち、文章を構成する文の半数以上が丁寧体であるものは9例あった。これらは、普通体のあらわれ方によって、さらに以下のような三つのタイプに分けられた。

- A. 直後の文にとって従属的な内容を表す文で普通体が見られるもの
… 3例
- B. 従属節で普通体が見られるもの… 5例
- C. 段落の最初の文で普通体が見られるもの… 1例

Aのタイプの該当用例3例は、(5)、(6)のように、普通体で書かれている文が直後の文にとって従属的な内容を表すものであった。

(5)【第3段落】

①人生の最後をどのようにすごすか。②それは人それぞれです。③個人の意見をきちんと理解して接してあげる事こそが、私達にできる事だと思いました。… (2003.12.11、No.2)

(6)【第2段落】

①伝統的な小さな町には、国際的な大都市のように新しく、進歩した人工的な都市はないかもしれない。②しかし、伝統的なものというのは、今すぐに作れる物ではないし、小さな町には、より身近に感じられる人間関係が築けるのではないかと思います。(2003.12.4、No.3)

(5)の場合、文①と、それに続く文②は、それぞれ別々の文として存在している。しかし、内容的には、文②の「それ」という指示語の内容が、文①で表

されている。つまり、文①が内容的に文②に従属していると考えられる。このことは、文②の「それ」という指示語の代わりに文①をあてはめて、文②を次のように書き換えることが可能であることから明らかである。

(7) 人生の最後をどのようにすごすかは人それぞれです。

(6)についても、(5)と同様に説明できる。文①と文②は別々の文として存在しているが、内容的に、文①は、文②の述語「思います」の引用節の一部を構成していると捉えることができる。それは、文①と文②を接続助詞「けれど」で結びつけて、次のように一文で表すことができることからわかる。

(8) 伝統的な小さな町には、国際的な大都市のように新しく、進歩した人工的な都市はないかもしれないけれど、伝統的なものというのは、今すぐに作れる物ではないし、小さな町には、より身近に感じられる人間関係が築けるのではないかと思います。

Bの該当用例5例は、いずれも接続助詞「が」を含む従属節において普通体が使われているものであった。

(9) 【第2段落】

理由は、チャーリーズエンジェルを見て私自身がかわいいと思いきそれからアクションものも好きになったからという単純なことなのだが、しかし、私はその単純な気持ち一つ一つで映画の人气が有る無いという一般的な評価につながり売れる売れないとわかれるのではないかと考えたからです。

… (2003.11.27、No.4)

(9)では、従属節の述語「単純なことなのだ」は普通体で書かれているが、主節の述語「考えたからです」が丁寧体で書かれており、両者の文体は不統一である。

同様に (10) についても、普通体で書かれている従属節の述語「嫌だ」と、丁寧体で書かれている主節の述語「選びます」に不統一感を持たざるをえない。

(10) (= (2))

【第1段落】

どちらも嫌だが、どちらか一つを選ばなければならないのなら私は、「テレビ」のない生活を選びます。(2003.7.3、No.5)

Cの該当用例1例は、(11)のように、段落の最初の文において普通体が使われているものであった。

(11)【第1段落】

①私は「建前と本音がちがうのは当たり前で、それを上手に使い分けることが大切だ」という意見に賛成です。

【第2段落】

②人間社会では、上下関係があり上司には本音を直接言うことは困難であり、人間関係を崩さないためにも「建前」が必要だと思うのです。③そのためにも、建前が本音とちがうのはしかたのないことだと私は思います。

【第3段落】

④しかし、建前と本音がちがっていてはただのうそつきとなるのではないかと思う人もいるだろう。(2003.10.23、No.9)

(11)では、第1段落と第2段落は丁寧体で書かれているが、第3段落の最初の文(文④)では普通体が使われている。

4.2.2. 普通体基調の文章(文章を構成する文の半数以上が普通体である文章)

今回調査対象とした小論文の解答において、普通体基調の文章、すなわち、文章を構成する文の半数以上が普通体であるものは15例あった。これらは、

丁寧体のあらわれ方によって、さらに以下のような二つのタイプに分けられた。

D. 文章の最初もしくは最後の一文が丁寧体であるもの…11例

E. 文章の中ほどで丁寧体が見られるもの…4例

Dに該当する11例のうち8例は、(12)のように、小論文の最初の文が丁寧体であり(文①)、残りの3例は、(13)のように、小論文の最後の文が丁寧体であった(文③)。

(12)【第1段落】

①私は異文化を理解する方法として、ファッションが良いと考えます。

【第2段落】

②その理由としては、ファッションはその土地によって異なっているからだ。③この事にはその土地に根付く、宗教や気候、またはそこに住む人々の思想が含まれていると思う。④様々な影響を受けているファッションというのは、まさにその土地に住む人々をよく表わしているものだと思う。

… (2003.6.26、No.16)

(13)【第3段落】(最後の段落)

①監督というものは、人にどれだけ影響を与えられるものか考えていると思う。②だから私も人に影響を与えてみたいし、自分の家族内のことならおもしろおかしく、身近に感じてもらえるのではないかと思う。③だから私はこのテーマを選びます。(2003.11.27、No.21)

Eに該当する4例はいずれも(14)のように、第2段落の最初の一文、もしくは最初の一文を含む複数の文において丁寧体が使われ、それ以降の文ではまた普通体が使われているというものであった。

(14) (= (1))

【第1段落】

①私は、自分の家で仕事ができる働き方を選ばない。

【第2段落】

②理由は二つあります。③一つは、もし私が家で仕事ができる仕事をしている時、分からないことや、すぐに上司と話したい時など、様々な事が起こるだろう。④そんな時に、会社にいたら、それらのことはすぐに出来るはずだ。… (2003.11.6、No.26)

4.2.3. どちらとも言えない文章 (丁寧体と普通体の文がほぼ同数あらわれる文章)
今回調査対象とした小論文の解答において、このタイプ、すなわち、丁寧体と普通体の文がほぼ同数あらわれる文章は3例あった。これらは、丁寧体と普通体のあらわれ方によって、さらに以下の二つのタイプに分けられた。

F. 文章のはじめとおわりの段落で丁寧体があられ、中ほどの段落で普通体があられるもの…2例

G. 文章のはじめの段落で丁寧体があられ、中ほどの段落からおわりまで普通体があられるもの…1例

紙幅の都合で用例は省略するが、いずれの該当用例も、一つの段落内であられる文体の種類は統一されていた。

5. 考察

今回の調査結果を見るかぎり、小論文の文章において丁寧体と普通体の混用が生じている場合、丁寧体と普通体の文が交互に、はじめからおわりまで出現するという例は少数であり、大半は、丁寧体基調の文章であれば普通体が、普通体基調の文章であれば丁寧体が、それぞれあらわれる箇所に、何らかの傾向があるということが言える。以下、4の調査結果から明らかなこととして次の四点を指摘したい。

まず第一点として、丁寧体基調の文章、普通体基調の文章、どちらとも言

えない文章（丁寧体と普通体の文がほぼ同数あらわれる文章）に共通することとして、文章の中ほどにおいてそれまで使用されていた文体とは異なる文体があらわれる箇所が、段落の最初であるということが挙げられる（4で提示したタイプC、E、F、Gが該当する）。なぜこのようなことが生じるのかということに関しては、現段階では推測の域を出ないが、今回の小論文の書き手は、20分という制限時間の中で文章の内容・構成を考えながら同時に文章を書き進めていくため、ある段落の内容を書き終えて次の段落の内容に移るまでに時間的な間隔が出来てしまい、それまで使用していた文体がそこで途切れてしまうということがあるのではないか。

第二点として、丁寧体基調の文章の場合、そこで見られる普通体の文は、読み手目当ての文ではなく、後続の文にとってちょうど従属的な内容を持つ場合がある（4で提示したAのタイプ）という点が指摘できる。これは、野田氏が言う「従属文」に該当するものであり、普通体となるものである。このような文を、文章全体の文体に合わせて丁寧体に直すと逆に不自然な文となる場合がある。たとえば、(15)の文①を、他の文の文体に合わせて丁寧体になおすと((16)の文①)、文②へのつながりに違和感が出るのではないか。

(15) (= (5))

【第3段落】

①人生の最後をどのようにすごすか。②それは人それぞれです。③個人の意見をきちんと理解して接してあげる事こそが、私達にできる事だと思いました。… (2003.12.11、No.2)

(16) ①人生の最後をどのようにすごしますか。②それは人それぞれです。
③個人の意見をきちんと理解して接してあげる事こそが、私達にできる事だと思いました。

したがって、このような読み手目当てではない文における普通体の扱いには注意する必要がある。

第三点として、これも丁寧体基調の文章の場合であるが、従属節の述語に普通体があらわれ、それが主節の述語の丁寧体語形と不釣り合いな形となっている場合がある（4で提示したBのタイプ）ことである⁽⁸⁾。今回調査対象とした小論文の解答では接続助詞「が」の例が見られたが⁽⁹⁾、この場合、直前に丁寧体、普通体の両方を要求することが可能なため⁽¹⁰⁾、このような不統一が生じたものと考えられる。

第四点として、普通体基調の文章の場合、文章の最初もしくは最後の一文が丁寧体であるもの（4で提示したDのタイプ）が、全体の約7割（15例中11例）を占めていたことである。これは、野田氏も指摘しているように、文章・談話において丁寧体があらわれるのは、聞き手・読み手目当ての文の場合であるということが関係していると考えられる。つまり、小論文のはじめとおわりというのは、書き手の意見が提示される箇所であるので、意見が向けられる読み手を意識した文になりやすく、その結果丁寧体があらわれやすいと考えられるのである。

6. 丁寧体と普通体の混用への対応—小論文作成の指導において—

実際の小論文の指導において、5で述べたような丁寧体と普通体の混用の傾向に対処するためには、いくつかの方法が考えられる。

第一点および第四点に関しては、最後まで書いた文章を読み直すことにより、文体の統一をすることを徹底させることが挙げられる。この点に関しては、小論文を作成する際の時間配分に注意を向けさせる必要がある。すなわち、構成を考え、文章を書き、その後書いた文章を読み直しととのえるという一連の作業を、制限時間内に行うことができるようになるための練習が欠かせない。

第二点および第三点に関しては、丁寧体基調の文章の問題であるため、最初から小論文を普通体で書くように指導するということが考えられる。今回は、文体の混用をしないように指導するにとどめたが、使用する文体を最初から普通体に限定しておけば、多少なりともこのようなケースは減少するのではないかと考えられる。

7. おわりに—今後の課題—

本稿では、小論文を構成する各文の主節および従属節の述語における丁寧体と普通体の混用のあらわれ方を調査した。しかし、丁寧体と普通体の混用は述語においてのみ問題になることではない。たとえば、今回調査対象とした小論文の解答に見られた(17)では、接続表現「だが」が、丁寧体である主節の述語「思います」に対して不釣り合いな感じを与えていると言わざるをえない。

(17) だが、どこにでも作ることのできる国際的な大都市よりも、昔からの伝統を守り続けている小さな町の方が、深みがあって良いと思います。

(2003.12.4、No.3)

今後は、このような文の述語以外における丁寧体と普通体の混用についても考察していきたいと考える。

注

- (1) 沖森・半沢 (1998) では「文体には、大きく2種類あり、文章の種類に即した類型的な様式と、書き手個人に即した個性的な様式とがある」(pp.79-80)としているが、本稿で言う文体とは、沖森・半沢 (1998) の言う2種類の文体のうちの、「文章の種類に即した類型的な様式」のことである。本稿では、後述するように、特に「だ・である」「です・ます」といった、述語にあらわれる表現形式に焦点を当てて考察する。
- (2) 就職試験で課される小論文の書き方を解説した小松 (2005) では、文体の不統一は避けなければならないとしている (p.93)。また、沖森・半沢 (1998) では、小論文に限定してはいないが、文章全般において、「『だ・である』『です・ます』『でございます』のうちのどれかを用いたら、それで全体を統一する」ことが望ましいと指摘している (p.73)。
- (3) 野田 (1998) では、文章・談話を構成する文を、聞き手に対する意識の強さに応じて、表1に示すような5つの種類に分類している。

表1 文章・談話を構成する文の種類

心情文	話し手の心情を表す文
従属文	ほかの文に従属している文
事実文	事実だけを客観的に述べる文
主張文	判断や説明を表す文
伝達文	質問や命令を表す文

※ 野田 (1998 : p.95) をもとに作成。

そして、表の下の方に位置する文ほど聞き手に対するはたらきかけが強い内容を表し、丁寧体になりやすく、逆に、表の上の方に位置する文ほど聞き手に対するはたらきかけが弱く、普通体になりやすいとしている (p.95)。

- (4) 小松 (2005) には、小論文とは「心情や意見などにメスを入れ焦点を当ててその理非正邪を明らかにする文章」であり、もっと大きなテーマを扱えば、それが論文になる、とある (pp.10-11)。
- (5) 注 (2) 参照。
- (6) 浜田他 (1997) では、「論文の文章は、手紙などと違って特定の人を読むことを前提としていないため、『です・ます』を使わずに書くのが普通である」としている (p.2)。
- (7) 小松 (2005) では、「です・ます体」と「である体」それぞれの表現効果を比較して説明し、小論文では「である体」の使用を勧めるとしている (pp.93-96)。一方、北村他 (1997) では、「あります・ございます」「です」「である」の三種類の文体をあげ、「課題や制限の状況に応じて、適宜使い分けなければならない」としており (p.49)、特に「である体」を使うべきだとはしていない。
- (8) 普通体基調の文章においては、従属節と主節の述語の文体の不統一は見られなかった。すなわち、従属節の述語に丁寧体があらわれ、主節の述語に普通体があらわれるという例はなかった。
- (9) (9) (本稿 p. 73)、(10) (本稿 p. 72) が該当。
- (10) (3a)、(3b) (ともに本稿 p. 75) 参照。

参考文献

- 沖森卓也・半沢幹一（1998）『日本語表現法』三省堂
- 北村弘明・真野須美子・川井章弘・清水眞澄・宇留田初実（1997）『情報と表現—日本語の表現と技法—』双文社出版
- 黒木晶子（2002）「日本語の文章における丁寧体と普通体の混用について—学術論文における謝辞の文章の分析を通して—」『文教国文学』46 pp.90-106
- 小松五郎（2005）『大学生の就職試験 小論文・作文の書き方』成美堂出版
- 仁田義雄（1991）「第六章 言表態度の要素としての丁寧さ」『日本語のモダリティと人称』pp.185-202 ひつじ書房
- 野田尚史（1998）「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194 pp.89-102 国語学会
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子（2001）「第7章 文法の理解と運用—〈3〉普通体語形の理解と運用」『日本語学習者の文法習得』pp.132-138 大修館書店
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- メイナード・K・泉子（1991）「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20-2 pp.75-80 大修館書店

（くろぎ あきこ 本学助教授）